

<研究ノート>

## 神聖ローマ皇帝カール4世の自叙伝

—翻訳と註解 (7) —

小松 進\*

### The Autobiography Written by Holy Roman Emperor Charles IV

—Translation into Japanese and Commentaries (7) —

Susumu KOMATSU\*

#### 1. はじめに

「チェコを扼する者は、ヨーロッパを制する」と言われるように、チェコはヨーロッパ大陸のまさに心臓部に位置する。そこにたたく古都プラハは「黄金のプラハ」と称えられ、ヴルタヴァ川西岸の小高い丘に立つ王城（現在の大統領府）から見はるかす旧市街の街並みは、遠く中世の面影をとどめ、往昔の殷賑と栄華を偲ばせる。中世後期にこの「黄金のプラハ」を築き、パリと並ぶ文化の中心地に育て上げ、チェコ王国の全盛を体現したのが、皇帝カール4世（1316～1378、チェコ国王としてはカレル1世）である。

しかし、チェコ王国におけるカールの生い立ちは、むしろ不遇であった。カールは、神聖ローマ帝国西端の領邦君主であるルクセンブルク伯ヨーハンを父に、チェコ民族伝来のプシェミスル王家の相続娘エリシュカを母に持つ。ヨーハンはプシェミスル王家に男系継承者が絶えたのち、異邦人としてチェコ王国

の王位に即くが（1310年）、チェコ人を心服させるには至らず、王国内に確固たる支配を打ち立てることに失敗する。そのため、ヨーハンはチェコ王国に居つかず、ルクセンブルク家の勢力拡大を図って、ヨーロッパ全土を東奔西走する。旅から旅へとさすらいの人生を送ったこのヨーハンにとって、王妃エリシュカとの間に生まれた嫡男カールは、自らの後継者というより、むしろ自らを脅かす厄介者であった。チェコ不在中に、ヨーハンに敵対する勢力がプシェミスル王家の正統な血筋をひくカールを担ぎ出して、ヨーハンを玉座から追い落とすことを画策する惧れがあったからだ。潜在的な脅威であったカールに対し、ヨーハンは情け容赦なく振舞った。幼いカールを家族から引き離し、プラハ郊外の人里離れた孤城に幽閉して周囲との接触を絶ってしまったのである。日の射すこともほとんどない孤城の小暗い一室で孤独な日々を過ごした思い出が、自叙伝に記されることはない。だが、その鬱屈した幼少時の体験が思索

\* 筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

や瞑想を好むカールの内省的気質の形成に少なからず影響を及ぼしたことは想像に難くない。

父王ヨーハンの思惑によって翻弄されるカールの人生はその後も続く。カールが7才になると、このうとましい嫡男をヨーハンはパリの宮廷に送り込んだ(1323年)。フランス王国の宮廷で教育を施させるのがルクセンブルク家のしきたりだったからだが、それは同時に、危険な火種をチェコ王国から遠ざける措置でもあった。幼いカールは、パリでヴァロワ家の姫君マルグリト(通称ブランシュ)を妻に迎える。この婚姻によって、ルクセンブルク家とヴァロワ家の同盟が成立し、ヴァロワ家がフランス王位に登ると、ルクセンブルク家とフランス王権との緊密な提携が、ヨーロッパ全土で展開されるルクセンブルク家の勢力拡張を支える基本政策となる。

放浪王ヨーハンは、稀代の野心家であった。その野心の究極の目標は、神聖ローマ帝国の皇帝位獲得に向けられた。その前提として、ヨーハンはロンバルディアを中心とするイタリア北部でルクセンブルク家の勢力圏を築く大胆な冒険に乗り出す(1331~1333年)。皇帝戴冠はローマで挙行され、それを実現するにはイタリア北部の掌握が不可欠であったからだ。この無謀ともいえる一か八かの賭けにも、手駒の一つとして、カールが投入される。遠く離れた異郷のパリに送られたのち、次は都市国家間の抗争が激しい火花を散らす北イタリアの荒波の中に放り込まれたのである。ヨーハンがイタリア不在中、国王名代としてカールは孤軍奮闘し、権謀術数うずまくこのイタリアの地で初めて現実政治の表舞台に立つ。その渦中でカールは権力闘争の凄まじさを目の当たりにしながら、やがて父王からの自立へと踏み出していく。その第一歩は、自叙伝に記される限り、天使からの警告無視というかたちを取った。ヨーハンと

カールの陣営では、キリスト教における七つの大罪の一つ、邪淫の罪が蔓延し、若いカールもその罪に染まる。行軍中のカールの夢寐に天使が現われ、これから遭遇する出来事を予告すると同時に、罪からの悔い改めを命じた。ところが、カールは天使の言葉を予言としてヨーハンに告げたものの、肝心な罪からの悔い改めを求める天使の警告を自分一人の胸に収め、「ヨーハンにも告げよ」、という天使の命令を無視する。それは、父王からあえて距離を置き、精神的に自立しようとする意思の表われとも解釈できる。そして、やはりイタリアの地において、その意思は目に見える行動として発現する。イタリアでの事業が暗礁に乗り上げると、ヨーハンは事業の継続をカールに託そうとするが、カールはそれを決然と拒否し、自らの意思で故国チェコへの帰郷を決断するのである(1333年)。

長らく、カールは、ヨーロッパという盤上で父王ヨーハンが自在に操る駒の一つでしかなかった。しかし、チェコへの帰郷をもって、自らの意思で行動し、独自の目標を追求する政策主体へと脱皮する。そして、その自立は、やがて父と子の公然たる反目へと発展していくであろう。長期にわたる不在ののち、再びチェコの地に足を踏み入れ、自らの政策を実現しようとする若き日の試みを綴るのが、今回訳出する自叙伝第8章の前半である。その梗概は、以下のとおりである。

- ・父王ヨーハンとカールのイタリア撤退
- ・ケルンテン、ティロール、ニーダーバイエルンの情勢
- ・カールのチェコ帰郷
- ・チェコ王国におけるカールの代理統治
- ・ケルンテンとティロールに対する敵対勢力の謀略
- ・父王ヨーハンの再婚

11年ぶりに故国の土を踏んだカールの目の

前に広がるのは、プシェミスル王朝時代に栄華を誇ったチェコ王国のまったく変わり果てた姿であった。民族伝来の王朝断絶後におとずれたチェコ王国の凋落。この凋落した王国の再建こそ、カールが取り組まなければならない課題であった。その再建の最初の試みが第8章で描かれるのだが、その意味するところを理解するには、チェコ王国が辿った歴史を繙かなければならない。本稿では自叙伝第8章の前半部を訳出するとともに、カールの試みの歴史的背景を明らかにするため、プシェミスル王朝時代のチェコ王国の歴史を略述しておきたい。ただし、今回はチェコ王国においてカールが直面した諸問題には踏み込まず、まずはプシェミスル王朝の起源とチェコ王国そのものの形成過程をかいつまんで説明する。

## 2. 自叙伝第8章前半（翻訳）※

この後、わが父は、戦費が底をつき、くだんのロンバルディーアの支配者たちと戦争をもはや遂行しえないことを観て取り、自身は撤退することを考え、その地の諸都市と戦争を余に託そうとした。しかし、余は断った。継続しても名誉を保つのが不可能なことだったからだ。そこで、父は、イタリアを去る許しを与え、余を先にチェコへ遣わすことにした。

わが敵たちと休戦が成ると<sup>1)</sup>、余はマントヴァ領を経てヴェローナへ、そこからティロール伯領に到り、その地でわが弟ヨーハン<sup>2)</sup>と出会った。このヨーハンを、わが父は、ケルンテン公にしてティロール伯<sup>3)</sup>の娘と縁組させていたのである。わが弟の舅であるこのケルンテン公は、先に触れたとおりの<sup>4)</sup>、まずわが母の姉アンナを妻に迎えた。その死後<sup>5)</sup>、ブラウンシュヴァイク公の妹<sup>6)</sup>と再婚し、この妻との間に先に触れた<sup>7)</sup>マルガレーテ<sup>8)</sup>という娘をもうけた。ケルン

テン公は、自分の死後、この娘と共にケルンテン公領とティロール伯領を、わが弟に託すことにしていた。というのも、公には男の世継ぎがいなかったからである。すでに記したように<sup>9)</sup>、わが父はこのケルンテン公をチェコから逐い、この追放ゆえに、二人はかつて敵対していたのだが、こうして両者は和解した。

次いで、余はバイエルン<sup>10)</sup>を通過し、わが上の姉マルガレーテ<sup>11)</sup>に出会った。この姉はバイエルン大公ハインリヒとの間に、ヨーハン<sup>12)</sup>という名の一人息子をもうけていた。

この後、余はチェコに辿り着いた<sup>13)</sup>。そこを跡にして、11年の歳月が流れていた。しかし、わが母エリシュカは数年前に帰らざる人となっていたこと<sup>14)</sup>を知った。さらに、その娘でわが二番目の姉ゲータも、母存命中にフランスに送られ、フランス国王フィリップ<sup>15)</sup>の嫡男ジャン<sup>16)</sup>に嫁いでいた<sup>17)</sup>。余が妻に迎えたブランシュは、このフランス国王の妹である。また、三人姉妹で一番末のわが妹アンナも、当時、フランスに嫁いだ姉の許に身を寄せていた。かくして、余がチェコに辿り着いたとき、余が目当たりしたのは、父と母もいなければ、弟や姉や妹もいず、近しい人が誰一人いないという状況であった。

チェコ語さえも、余はすっかり忘れ果てていた。その後チェコ語を学び直し、他のどのチェコ人にも引けをとらぬほど、話したり、理解したりするようになった。ところで、余は神の恩寵により、チェコ語のみならず、フランス語、ロンバルディーア語、ドイツ語、ラテン語を、話し、書き、読むことができた。それも、そのうちどの言葉をとっても、他の言葉と同じくらい、余は、書くことも、読むことも、話すことも、理解することもできた。

その頃、わが父はルクセンブルク伯領に兵

を進めていた。リエージュ司教<sup>18)</sup>、ユーリヒ辺境伯<sup>19)</sup>、ヘルデルン伯<sup>20)</sup>など数多の盟友<sup>21)</sup>と共に、ブラバント大公<sup>22)</sup>と一戦を交えるためである。そこで、父は、その不在中、チェコにおける執政権を余に託すことにした。

余が目にしたそのチェコ王国は、王室資産の一切合切を含め、抵当に入れられず自由になる城が一つもないほど荒廃し、余は他の市民と同じように市街の家々のどこかに居を構えざるをえなかった。プラハの王城さえ、国王オタカル<sup>23)</sup>の時代から灰燼に帰したまま、見捨てられ取り壊されて、瓦礫の山と化していた。その地に、余は莫大な費用をかけ、新たに壮大にして美しい王宮を造営させることにした。それは、今日、人の目にするとおりである。

その頃、余はわが妻の許に使者を遣わした。その時まで、妻はルクセンブルクに身を寄せていたからである。妻が来て1年後に、長女マルガレーテが誕生した<sup>24)</sup>。

ところで、当時、わが父は余にモラヴィア辺境伯領を授けていたので、余はモラヴィア

辺境伯の肩書を帯びていた。さて、チェコでも義を尊ぶ世人は、余がチェコ歴代の国王たちの古き血筋を引くのを知って余を愛し、城や王室資産を取り戻すのに力を貸してくれた。そこで、余は多大な費用と労力をつぎ込み、チェコにおいては、クシヴォクラート、ティージョフ、リフニツェ<sup>25)</sup>、リチツェ、フラデッツ・クラークロヴェー、ピーセク、ネチチニ、ズビロフ、タホフ、トゥルトウノフの諸城を、モラヴィアにおいては、ルコフ、テルチ、ヴェヴェジー、それにオロモウツ、ブルノ、ズノイモの諸城を取り戻し、他にも、抵当に入れられて王権から離れていた数多の王室資産を請け戻したのである。かくして、自ら進んで奉仕を願ひ出る騎士たちを余は多数擁し、王国は日増しに繁栄の一途を辿り、善良なる世人は余を愛し、邪悪な連中は恐れて悪事を慎み、王国内に正義が生き生きとみなぎることになった。というのも、それまでは領主たちが王国を自分たちの間で切り取りあい、その大方が僭主となって、さも当然かのごとく、国王を畏れ憚らなかつたからである。こうして、2年間、余は王国の舵取りを



現在のチェコ共和国

H.Agnew, *The Czechs and the Lands of the Bohemian Crown*, Stanford, 2004, P.5. の地図にもとに作成

担い、日夜その改善に努めたのである。

この時期に、余はわが妹アンナを、オーストリア大公オットーに輿入れさせた<sup>26)</sup>。

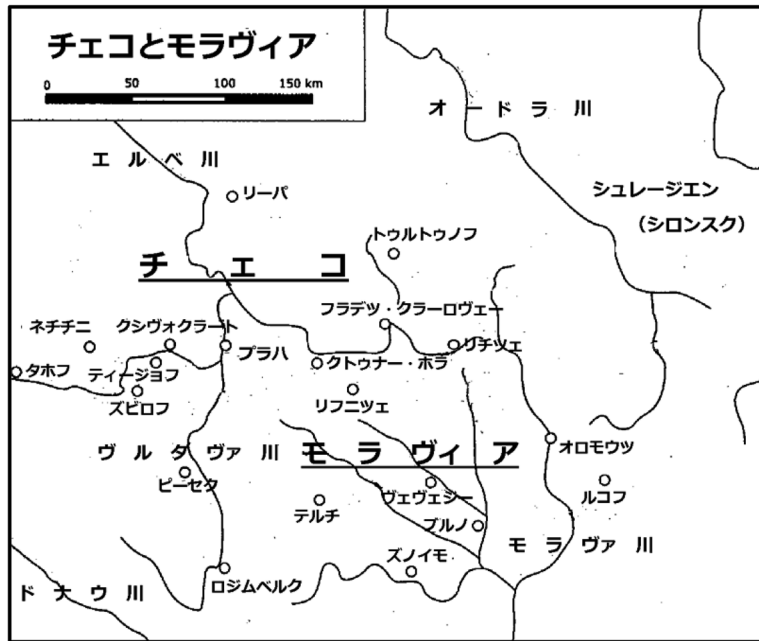
同じ頃、わが弟の舅であるケルンテン公が、天寿を全うした<sup>27)</sup>。公亡きあと、ケルンテン公領とティロール伯領は、当然わが弟の所有に帰すはずであった。ところが、皇帝を僭称していたルートヴィヒ<sup>28)</sup>が、オーストリア大公アルプレヒト<sup>29)</sup>とオットーとひそかに結託し、秘密裏に不当にもわが弟の領地を分割することを画策したのである。ルートヴィヒはティロール伯領を、オーストリア大公たちはケルンテン公領を奪い取る算段であった<sup>30)</sup>。前述したとおり<sup>31)</sup>、わが父はルートヴィヒの皇帝位獲得に尽力したのだから、ルートヴィヒはそれを蔑ろにする忘恩の徒である。オーストリア大公も、余の妹を妻に迎えていながら、くだんのケルンテン公亡きあと時を移さず、ケルンテン全土における

公の名代アウフェンシュタインの領主<sup>32)</sup>と陰謀をめぐらし、自分の兄と協力してケルンテンを横奪してしまった。アウフェンシュタインの領主が、自らの一存で公領を兄弟に引き渡し、二人が所有するのを許してしまったのである。こうして、わが弟はケルンテン公領を失った。しかし、ティロール伯領の人々はルートヴィヒに服従するのを望まず、そのままわが弟への忠節を守った。

こうした出来事があった後、わが父がチェコに帰郷し、再婚して王妃に迎えた妻を連れて来た<sup>33)</sup>。その妻はベアトリスと云い、フランスの王族たるブルボン公の姫君で、のちに一人息子を産み、その男児はヴェンツェル<sup>34)</sup>と名づけられた。

### 3. チェコ国家とプシェミスル家の起源

チェコは、英語でボヘミア (Bohemia)、



P.W. Knoll, F.Schaer, Autobiography of Emperor Charles IV and his Legend Of St.Wenceskas, New York, 2001. P.259. の地図をもとに作成

ドイツ語でベーメン (Böhmen) と表記されるが、これらの呼称はケルト人の一部族 Boiohaemum (通称ボイイ族) に由来する<sup>35)</sup>。ケルト人は紀元前1000年期にヨーロッパ大陸の中央部を広く占拠していた民族で、紀元前4世紀以降チェコの地を支配したのがボイイ族である。しかし、今日のチェコ人は、ボイイ族の末裔ではない。中世初期に東ヨーロッパ一帯に拡散したスラヴ人の一集団で、ポーランド人やスロヴァキア人などを含む西スラヴ諸族に分類される。西スラヴ諸族に属するこの集団は、いつチェコの地に到来し、いかにして国家を建設したのであろうか。

スラヴ人が現在の土地に定着する以前、ヨーロッパの内陸部を支配していたケルト人にとって替わったのはゲルマン人である。スカンディナヴィア半島南部、ユトランド半島、バルト海沿岸の北ドイツなどを原住地とするゲルマン人は、紀元前3世紀以降ヨーロッパの内陸部に進出し、先住のケルト人を、あるいは吸収同化し、あるいはヨーロッパ周縁部に駆逐しながら、紀元前後、ローマ帝国の北の境界線をなすライン川とドナウ川に到達する。こうしたゲルマン人の南下に伴って、チェコを占拠していたケルト人のボイイ族も、紀元前1世紀に姿を消した<sup>36)</sup>。紀元3世紀の軍人皇帝時代にローマ帝国が政治的混乱に陥って弱体化すると、ゲルマン人はローマ帝国の内部にも進出を開始する。そして、375年、アジア系遊牧民フン族の西進に突き動かされたゲルマン人の一部がドナウ川を渡って大挙帝国内に雪崩れ込む時、ゲルマン人の南進は民族大移動の大奔流となった。とりわけ長い距離を移動し帝国内部の奥深くに流れ込んだのは、黒海北岸から東ヨーロッパに広がっていた東ゲルマン諸部族である。これら諸部族は4世紀から6世紀にかけてのおよそ2世紀あまりの間に豊かな土地を求めて帝国内に流入し、西ローマ帝国を滅亡

に追いやった。その一方、東ゲルマン諸部族の大移住は、侵入以前の彼らの居住地に、人口希薄な広大な土地を残した。この人口空白地帯に漸次居住圏を拡大していったのがスラヴ人である。

スラヴ人の居住地はドニェプル川とヴィスワ・オードラ川に挟まれたいずれかの土地と推測されているが、東ヨーロッパ一帯に広く拡散したのは、東ゲルマン諸部族がローマ帝国内に移住した後の6、7世紀である<sup>37)</sup>。こうした拡散の過程で、スラヴ人は三つの言語集団に分かれた。ロシア人やウクライナ人などを含む東スラヴ諸族、セルビア人、クロアチア人、ブルガリア人などを含む南スラヴ諸族、ポーランド人やスロヴァキア人などを含む西スラヴ諸族の三つで、そして、西スラヴ諸族の中に独自の言語集団として登場するのがチェコ人とモラヴィア人である<sup>38)</sup>。

東ヨーロッパに浸透したスラヴ人の間で最初に形成された国家は、7世紀前半のサモの国である。サモとは西方のフランク王国から来た商人で、中央アジアから侵寇した遊牧民のアヴァール人と西ヨーロッパで勢力を拡大しつつあったフランク王国の圧迫に対抗するため、おそらくはモラヴィア南部を拠点に、その周囲のスラヴ諸族から擁立された政治的指導者である。しかし、サモが没すると(658/659年)、この部族連合は瓦解する<sup>39)</sup>。

西スラヴ諸族が本格的に自らの国家建設へ踏み出すのは、9世紀になってからである。その契機は、遊牧民アヴァール人国家の解体である。アヴァール人は6世紀半ばから8世紀にかけて現在のハンガリー平原付近を拠点にビザンツ帝国とフランク王国の間で勢威を振るい、東ヨーロッパのスラヴ人の多くがこの遊牧民国家に服属した。サモの国は、この支配に対する反乱から生まれる。こうしたスラヴ人の自立などで弱体化したアヴァール人に最後の止めを刺したのは、フランク王国のカール大帝である。大帝の征討によってア

ヴァール人の国家が崩壊すると（805年）、急速に勢力を拡張したのはモラヴィア人で、彼らは、ドナウ川中流から、エルベ川、オードラ川、ヴィスワ川の上流にかけて大モラヴィア国（830年頃～906年）を建設した。この西スラヴ族最初の国家はスラヴ人へのキリスト教伝道の拠点となったことで、歴史に名をとどめている。キリスト教布教の担い手となったのは、メトディオスとキュリロス（本名はコンスタンティノス）の兄弟で、＜スラヴ人の使徒＞と称せられるこの兄弟は大モラヴィア国の要請によりビザンツ帝国から派遣され、スラヴ人聖職者の養成にあたった（863～867年）。こうした布教活動における二人の最大の功績は、史上初めてスラヴ語を用いて典礼を行ない、ギリシア文字からグラゴル文字を考案したことである<sup>40)</sup>。グラゴル文字はのちにキリル文字の母胎となり、周知のように、この文字は、今日、ロシア、ブルガリア、セルビアなどに受け継がれている。

大モラヴィア国の出現は、隣接するチェコ人の国家建設を促した。チェコでは従士団を擁する豪族たちが各地に城砦を築いて割拠し、当初は、この豪族たちの連合体が大モラヴィア国の同盟者となり、その勢力拡大の一翼を担った<sup>41)</sup>。ところが、883年、大モラヴィア国は強引にチェコ全土を併呑し、事態は一変する。この時、チェコにおいて国王権力を代行する大公に選ばれたのが、プシェミスル家のボジヴォイ1世（位883～894年頃）である。プシェミスル家はチェコ中央部のレヴィー・フラデツを拠点とする豪族で、ボジヴォイはおそらくメトディオス自身からキリスト教の洗礼を受け、自らの拠点にチェコで最初の教会を築き、チェコ民族のキリスト教化と他の豪族に対する支配権強化を図った<sup>42)</sup>。ボジヴォイの事業は嗣子スピチフニェフ1世（位894～915年）に引き継がれ、この後継者はレヴィー・フラデツに新たな城塞を築く。この城塞が、プラハ市の起源で

ある。ただしスピチフニェフは父とは違い、895年、弱体化しつつあった大モラヴィア国の軛を断ち、ドイツ国家の前身である東フランク王国に服属する政策へと転じた<sup>43)</sup>。これは、結果としてチェコ国家のその後の行方を方向づける決断であった。

なお、大モラヴィア国は、ロシア南部のステップ地帯を西進した精悍なアジア系遊牧民マジャール人の襲来により滅亡した（906年）。それから半世紀あまり、マジャール人はヨーロッパ全土に略奪遠征を繰り返し、955年、ドイツ国王オットー1世の軍勢に敗れて以降定住生活に移り、10世紀末、アールバード家の君主の下でキリスト教に改宗しハンガリー王国を築く。こうしたマジャール人の到来とハンガリー王国の建国は、東ヨーロッパの民族地図を塗り替えた。スラヴ人の世界に楔を打ち込み、西スラヴ諸族と南スラヴ諸族を南北に分断する結果となったからである。

チェコが朝貢した東フランク王国では、カロリング王家が断絶し（911年）、国内で最も強大なザクセン大公が王位に即いて、ドイツ最初の王朝を開いた（919年）。さらに、このザクセン王朝のオットー1世がイタリア北・中部を平定し、962年ローマ皇帝に戴冠されて、いわゆる神聖ローマ帝国が誕生する。こうしたドイツ王権の強大化は、チェコの歴史に大きく影を落とした。それを象徴する事件が、聖ヴァーツラフの暗殺である。プシェミスル家4代目のチェコ大公ヴァーツラフ（位921～929/935年）は、ドイツ国家、とりわけ新興のザクセン王家との提携を強め、ザクセンの聖人ヴィートの聖遺物をプラハ城内に安置して聖ヴィート教会を創建した<sup>44)</sup>。しかし、チェコ国内には、キリスト教以前の異教的伝統にまだ固執し、キリスト教の浸透と一体化したドイツ王権の影響力増大を阻もうとする勢力が存在した<sup>45)</sup>。その先頭に立ったのがヴァーツラフの弟ボレスラフ1世で、兄弟の対立は、ボレスラフによる兄の殺

害という悲劇に発展する（929年もしくは935年）。悲運のヴァーツラフは、キリスト教の信仰篤く、教養豊かで高潔な君主へと理想化され、のちに列聖されてチェコの守護聖人となる。一方、ボレスラフ1世（位929/935～972年）は、異教の存続には執着せず、まずはドイツ王権からの自立を図った。しかし、それは成功せず、950年、オットー1世の圧力に屈し、マジャール人との戦いではドイツ軍の陣営に加わり、ドイツ国家に従属しない独立国家の建設という途は、最終的に断られた。

兄殺しという悪名がつきまとうが、ボレスラフ1世は国内では集権化を推し進めてチェコ国家の確立に大きく寄与した。この剛猛な大公はなおも各地に割拠していた豪族たちの力を削ぎ、チェコ全土に行政官を配置する城砦を築いて民衆から税を徴収し、プラハをヨーロッパ全土で展開される遠隔地商業の拠点の一つに育て上げた。大公の権力を支えたのは膨大な数にのぼる従士団で、それを維持するためにボレスラフは周辺地域の征服に乗り出し、クラクフ市を中心とするマウォポルスカ（ポーランド南部）、シュレージエン、モラヴィア、スロヴァキアへと領土を拡大した<sup>46</sup>。そして、その嗣子ボレスラフ2世（位972～999年）がチェコ国内最大の豪族スラヴニーク家を995年に滅ぼした時、プシェミスル家によるチェコ国家の建設事業は完成する。

#### 4. チェコ国家の王国昇格

チェコは、三方を、ドイツ人、ポーランド人、ハンガリー人に囲まれ、これら三勢力の動向と複雑に絡み合いながら、その歴史は展開する。プシェミスル家のチェコ、ザクセン家のドイツ、ピヤスト家のポーランド、アールパード家のハンガリーは、いずれも9世紀末から10世紀にかけて、ほぼ同じ時期に歴史

の舞台に登場した。しかし、国家のあり方において、チェコのみは他の三国と異なる歴史を歩む。ザクセン家のドイツは神聖ローマ帝国へと躍進してヨーロッパ世界における世俗勢力の頂点に立ち、その皇帝オットー3世は、1000年、ハンガリーのアールパード家とポーランドのピヤスト家に王冠を授け、それぞれの国内に独立の大司教座を置くことを許した。ところが、チェコの運命は違った。神聖ローマ帝国はチェコ大公に服従を強い、王号を得て自立することを阻み、プラハに司教座が設けられたものの（973年）、それをドイツのマインツ大司教座の管轄下に置いた。こうして、国家形成の当初から、チェコは、政治的にも、宗教的にも、神聖ローマ帝国に従属し、帝国内の大公領と位置づけられたのである。しかも、チェコ国家の版図も、大幅に縮減した。聖ヴァーツラフを暗殺したボレスラフ1世の治下に、チェコは周辺地域に広大な征服地をもち、かつての大モラヴィア国に匹敵する強盛を誇ったが、この大公の死後、征服地を新興の隣国に相次いで奪われた。マウォポルスカ（ポーランド南部）とシュレージエンはポーランドに奪取され、スロヴァキアはハンガリーに併合されたのである。チェコ大公の支配下に残ったのは、チェコとモラヴィアのみとなった。そして、大公ブジェチスラフ1世（位1034～1055年）は、チェコの大公位を長子に相続させ、モラヴィアはその他の息子たちに分割した。これは大公位をめぐる後継者争いを未然に防ぐ措置で<sup>47</sup>、モラヴィアはプシェミスル家の親族領となった。さらに、神聖ローマ皇帝は1182年モラヴィアを辺境伯領に昇格させたが、チェコ大公がこの辺境伯領の名目上の宗主権を把持し、モラヴィアがチェコに従属するかたちで、チェコ国家の一体性は保たれた<sup>48</sup>。

こうして強大なドイツ王権の圧力にさらされ、チェコのプシェミスル家がその後採りうる道は限られることになった。幾度か繰り返



されたドイツの軛を断つ試みは、いつも水泡に帰した。残されたのは、神聖ローマ帝国内の従属国にとどまりながら、帝国内でチェコの地位を向上させていく道である。それは、端的に王号獲得を目指す試みへと向かった。

11世紀に入って間もなく、チェコの神聖ローマ帝国に対する服属形態が変化した。1002年、チェコ大公は皇帝から、チェコ国家を知行地として授封されたのである。つまり、大公と皇帝とは封建的主従関係で結ばれ、知行地安堵の見返りに、大公は主君たる皇帝に援助と助言の義務を負う家臣となった。11世紀と12世紀をつうじて、その義務を忠実に果たすことにより、チェコ大公は地位の向上を図っていく。皇帝が窮状に陥り家臣の切実な援助を必要とするとき、その機会は訪れる。

11世紀後半、神聖ローマ皇帝とローマ教皇との間に、ヨーロッパ世界を震撼とさせる叙任権闘争（1075～1122年）が勃発した。皇帝ハインリヒ4世が教皇によって破門され、帝国内の諸侯が相次いで皇帝に叛旗を翻す中、チェコ大公ヴラチスラフ2世（位1061～1092年）は教皇からの誘いに乗らず終始皇帝陣営に踏みとどまり、窮地にあったハインリヒを援けた。ハインリヒはその功に報い、1085年、ヴラチスラフに一代に限って国王を名のる許可を与えた。次の王号獲得の機会は、神聖ローマ帝国三番目のホーエンシュタウフェン朝の時代に訪れた。皇帝フリードリヒ1世（バルバロッサ）は経済的繁栄を謳歌する北イタリアに皇帝権力の基盤を築こうとする、いわゆるイタリア政策を展開したが、北イタリアの都市国家コムーネがそれに反発して蜂起し、北イタリアは争乱の巷と化した。フリードリヒは再三遠征軍を組織してその鎮圧を図り、チェコ大公ヴラチスラフ2世（位1140～1172年）の率いるチェコ軍も遠征に参加して華々しい戦果を上げた。その武功に報いて、フリードリヒは、1158年、ヴラチスラ

フ2世にやはり一代に限って国王を名のる栄誉を授けた。こうした2度の王号獲得は大公個人の功績に対する恩賞という性格をもち、必ずしもチェコ国家自体の地位向上には繋がらなかった。その地位向上は、一代限りではない世襲の王号獲得を俟たなければならなかった。それを実現したのが、プシェミスル・オタカル1世（位1192～1230年）である。

ホーエンシュタウフェン家は1194年に南イタリアのシチーリア王国の王位を継承し、ますますイタリアの政局に深く巻き込まれた。とりわけ皇帝フリードリヒ2世はシチーリア王国に生まれ育ち、治世の多くをイタリアでの支配権強化に費やした。一方、アルプス以北では、国王権力を犠牲にして、諸侯による領邦国家の建設とドイツ国家の分解を助長する結果を招く。こうした情勢を、プシェミスル・オタカルは巧みに利用した。ドイツ国内の政治的混乱に乗じて、1198年、王号を世襲する権利を獲得した。そして、フリードリヒ2世に対する支援の見返りに、この皇帝が1212年に発布したシチーリア金印勅書において、プシェミスル・オタカルは画期的成果を手にする。この勅令は、チェコ国家の支配者が世々に国王を名のる権利を帝国法上初めて明文化し、帝国内におけるチェコ王国の地位を盤石なものとしたのである。しかも、ドイツのマインツ大司教座の管轄下にありながら、チェコ国内においてはチェコ国王自身が聖職者を叙任する権限も明記された<sup>49)</sup>。皇帝との主従関係は維持されたものの、チェコ王国は皇帝からの内政干渉を受けない事実上の独立国家となった。神聖ローマ帝国内で、他の領邦とは異なり、唯一国王を戴く特殊な地位を築いた。

13世紀初頭に王国へと躍進したチェコ国家は、その世紀後半にプシェミスル王家の黄金時代を迎える。しかし、その黄金時代は半世紀余り続いたのち、突如幕を閉じる。そのとき、12世紀頃から進行していた国家体制や社

会構造の変化は、王国の基盤を揺るがす大問題に発展する。異郷をさすらったのち久方ぶりに故国の土を踏んだ若きカール4世が直面しなければならなかった大問題である。プシェミスル王家の絶頂と没落、それに伴う国家と社会に生じたひずみに関しては、稿を改めて論じることにする。

#### 註

※ 翻訳に際して底本としたのは、従来どおり、E. Hillenbrand, *Vita Caroli quarti — Die Autobiographie Karls IV.*, Stuttgart, 1979. である。なお、今回は地名の表記や位置に関し、チェコ語訳の、J.Pavel, *Karel IV . Vlastní Životopis*, Praha, 1978.、英語訳の、P.W.Knoll, F.Schaer, *Autobiography of Emperor Charles IV and his Legend of St.Wenceskas*, New York, 2001.、フランス語訳の、P.Monnet, J.-C. Schmitt, *Vie de Charles IV de Luxembourg*, Paris, 2010.、を参考にした。

- 1) 1333年7月11日に休戦交渉が始まり、同月19日にカステルヌオーヴォで休戦協定が締結された。
- 2) 正式名は、ヨーハン・ハインリヒ (1322～1375年)。
- 3) ハインリヒ6世 (1270頃～1335年)。ゲルツ家の領邦君主。1295年、父マインハルト2世から、兄弟たちと共に、ケルンテン公領とティロール伯領を相続し、1310年からは両領邦の単独領主となった。プシェミスル家のチェコ国王ヴァーツラフ2世の長女アンナと1306年に結婚し、プシェミスル王家の男系継承者が絶えると、1307年、チェコ国王に推挙された。しかし、1310年、アンナの妹エリシュカを妻に迎えたルクセンブルク家のヨーハンがドイツ国王たる父王ハインリヒ7世の後ろ楯を得てチェコ王国に攻め入り、ハインリヒ6世は敗れて、チェコ王国を逐われた。だが、ハインリヒ6世はヨーハンの王位を認めず、その後もチェコ国王を称し、ゲルツ家とルクセンブルク家の敵対関係は続いた。
- 4) 自叙伝第3章。
- 5) 最初の妻アンナの逝去は1313年。
- 6) アーデルハイト (1285～1320年)。ハインリヒ6世との結婚は1315年。
- 7) 自叙伝第4章。
- 8) マウルタシュ (大口という意味) と綽名されたティロール最後の女伯 (1318～1369年)。カールの弟ヨーハン・ハインリヒとは1330年に結婚。
- 9) 自叙伝第3章。
- 10) 正しくは、ニーダーバイエルン。バイエルン大公領は、1255年、西部のオーバーバイエルンと東部のニーダーバイエルンに分割された。
- 11) マルガレーテ (1313～1341年) は、1328年、ニーダーバイエルン大公ハインリヒ2世に嫁いでいた。
- 12) ヨーハン (1329～1341年)。
- 13) カールは、1333年10月30日に、プラハ市に入った。
- 14) 1330年9月28日、プラハで永眠。
- 15) ヴァロワ家初代のフランス国王フィリップ6世 (位1328～1350年)。
- 16) のちのフランス国王ジャン2世 (位1350～1364年)。
- 17) ゲータ (1315～1349年) が、フランス王太子ジャンに嫁いだのは、1332年。
- 18) アードルフ2世 (位1313～1344年)。
- 19) ヴィルヘルム・フォン・ハイムバッハ (位1328～1361年)。
- 20) ライナルド2世 (位1326～1343年)。
- 21) 盟約締結は、1330年11月30日。
- 22) ヤン3世 (位1312～1355年)。
- 23) プシェミスル・オタカル2世 (位1253～1278年)。プシェミスル王朝時代のチェコ王国において、その強盛を体現。オーストリア大公領でバーベンベルク家が断絶すると、この大公領を手中に収め、さらにシュタイアーマルク、ケルンテン、クラインなどに支配圏を拡げて、

- 中央ヨーロッパに覇権を確立した。ドイツで事実上国王が不在の大空位時代に終止符を打つ1273年の国王選挙では、ハプスブルク家のルードルフ1世と王位を争ったが敗北。しかし、オタカルは、ハプスブルク家で初めて王位に即いたルードルフの王権を認めず、帝国追放に処せられた。両者の対立は武力衝突に発展し、1278年、デュルンクルトの戦いで、オタカルは敗死。ルードルフがオタカルから奪い取って以来、オーストリアは20世紀初頭までハプスブルク家の所有に帰すことになる。
- 24) 妻ブランシュがプラハに到着したのは、1334年7月12日。長女のマルガレーテは1335年5月24日に誕生した。
- 25) J. Pavel のチェコ語訳では、スヴィェトリーク。
- 26) アンナとオットーの婚儀が行われたのは、1335年2月16日。アンナは3年後の1338年、夫のオットーはその翌年、若くしてみまかった。
- 27) 1335年4月4日。
- 28) バイエルンのヴィッテルバッハ家出身の皇帝ルートヴィヒ4世（位1314～1347年）。
- 29) アルブレヒト2世（1298～1358年）。ルートヴィヒ4世と王位を争った兄のフリードリヒ1世（美公）の死により、1330年、弟のオットーと共にオーストリア大公位を継承。1339年、オットー亡きあとは、単独でオーストリア大公領を支配。
- 30) ルートヴィヒ4世は、1335年5月2日に、オーストリア大公のアルブレヒトとオットーに、ケルンテン、クライン、ティロール南部を授封し、5月5日、その地の住民たちに兄弟への服従を命じた。
- 31) 自叙伝第4章。
- 32) コンラート・フォン・アウフェンシュタイン。1299年以来、ケルンテン公不在の折には、公領の名代を務めた。1335年5月1日、皇帝ルートヴィヒ4世は、ケルンテン公領を授封されるオーストリア大公への服従を、コンラートに命じた。コンラートはハプスブルク家のケルンテン支配を容認したのち、1338年に死去。
- 33) ヨーハンは、1334年12月にブルボン公ルイ1世の娘ベアトリスと再婚し、翌1335年7月30日、新妻を伴ってプラハに到着した。
- 34) 1337年誕生。ヨーハンは、このヴェンツェルをルクセンブルク伯領の相続人と定め、カールにその後見を託した。カールは、1354年、ルクセンブルク伯領を大公領に昇格させ、ヴェンツェル（位1354～1383年）に大公領の支配権を委譲する。
- 35) J. Pánek (ed.), *A History of the Czech Lands*, trans. by J. Quinn, P. Key, L.Bennis, Praha, 2009, p.57.
- 36) H. Agnew, *The Czechs and the Lands of the Bohemian Crown*, Stanford, 2004, p.7.
- 37) *ibid.*, p.8.
- 38) *ibid.*.
- 39) J.Pánek (ed.), *ibid.*, p.59.
- 40) *ibid.*, p.67.
- 41) *ibid.*, p.74.
- 42) *ibid.*
- 43) *ibid.*
- 44) J.K. Hoensch, *Geschichte Böhmens*, München, 1987, S.45.
- 45) K. Bosl (Hrsg.), *Handbuch der Geschichte der Böhmischen Länder*, Bd.1, Stuttgart, 1967, S.215.
- 46) J. Pánek (ed.), *ibid.*, pp.73.
- 47) *ibid.*, p.83.
- 48) H. Agnew, p.17.
- 49) H. Agnew, p.19.